

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00036

研究課題名(和文) 人新世とゲノム編集の時代におけるブックチンの自由概念とヒエラルキー批判の再検討

研究課題名(英文) Revisiting the Concept of Bukhtinian Freedom and the Critique of Hierarchy in the Era of the Anthropocene and Genome Editing

研究代表者

熊坂 元大 (KUMASAKA, Motohiro)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・准教授

研究者番号：60713518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、自然への人為的介入が生態系レベルでも遺伝子レベルでも進んでいる現代における自然理解を、ブックチンのヒエラルキー批判の観点から検討した。自然や生命を道具的に理解する姿勢を批判するうえで、ブックチンは弁証法的自然主義をその根拠とした。本研究では、自然を自由と多様性の拡大と見なすブックチンの態度を一種の環境徳として位置づけて取り組んだ。この成果については今年度中に論文として完成させる予定である。また、本研究の理論的土台を整理する作業の一環として、環境徳倫理学の主要文献の一つであるロナルド・サンドラーの著作を『環境徳倫理学』として翻訳し2022年に出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

環境保護につとめる道徳的動機には、人権侵害や不正義への問題意識と並んで、個人の生や社会のあり方についての徳倫理的関心があげられるが、この点についての研究は国内ではまだ研究を発展させる余地がある。本研究はそうした取り組みの一つとして貢献するものである。また、これまでのところ日本国内では環境徳倫理学について翻訳がほとんど進んでいない状況であるが、サンドラーの著作を日本語読者に紹介できたことは、哲学・倫理学関係者のみならず、環境保護に関心のある人びとへの大きな貢献だと考える。

研究成果の概要(英文)：This study examines the understanding of nature in the contemporary era of human intervention in nature, both at the ecosystem level and at the genetic level, from the perspective of Bookchin's critique of hierarchy. In critiquing the instrumental understanding of nature and life, Bookchin drew upon dialectical naturalism as his rationale. In this study, I worked on Bukhtin's attitude, which regards nature as freedom and the expansion of diversity, as a kind of environmental virtue. The results of this study will be completed as a thesis in 2023. In addition, as part of the work to organize the theoretical foundation of this study, I translated a book of Ronald Sandler, Character and Environment, one of the major literatures on environmental virtue ethics, as "Environmental Virtue Ethics" and published it in 2022.

研究分野：環境倫理学

キーワード：環境徳倫理学 マレイ・ブックチン ヒエラルキー 自由 人新世 ゲノム編集

## 1. 研究開始当初の背景

環境問題への哲学・倫理的取り組みは1960年代以降に盛り上がりを見せたが、当時の取り組みの多くは、自然は人間のために存在するのであり人間が恣意的に利用し破壊しても構わないとする人間中心主義への批判を軸とするものだった。その後、この状況は、(1)自然の内在的価値をはじめとする幾つかの概念や理論の整合性に拘泥し、現実的な問題からはなれた象牙の塔の営みに終始している、(2)原生自然のように人間の痕跡を感じられない自然にばかり注目し、自然を利用して生活している社会や汚染により苦しむ人びとをめぐる不正義の問題に十分な注意を払っていない、といった理由から批判されるようになった。

本研究もこの問題意識を共有したうえで取り組むものではあるが、しかし環境問題を人間社会における正義の課題としてのみとらえてしまうことにも問題はある。というのも、正義の領域内に(かつてのように人間だけ、あるいは白人男性だけではなく)さまざまな属性を持つ人びとや将来世代、さらには哺乳類のような一部の生物を取り込むよう議論を構築したとしても、議論の枠外に置かれる生物や生態系のような集合体、景観といった、環境倫理学が射程に取り込もうとしていた存在は、単なる資源の立場に戻ることに成り、議論はそうした資源をいかに効率よく、そして公正に分配・活用するかという経済的な視点、あるいは人間中心主義的な視点へと回帰することになるからである。この回帰が抱える問題点は二つある。一つは、環境問題に対する私たちの関心は、率直に表明する人は少ないだろうが、汚染で苦しむ人びとに向けられるよりも美しい景観や愛くるしい動物により多く向けられることが少なくない、それどころか苦しむ人びとを見たくないと思う人すらいるだろうということである。環境問題の不正義としての側面だけに光を当ててしまえば、社会の環境問題への関心を弱体化することにつながりかねない。もう一つは、私たちの関心の対象との倫理的関係を、それが人間であれ人間以外の存在であれ、正義の文脈だけで論じることは、私たちの道徳的語彙を貧困なものとしてしまう。また、公正かつ効率的な資源の分配と活用にもみ焦点を当ててしまえば、自然環境が持つ多様な価値を一元的なものへとやせ細らせてしまう。結果として私たちの環境問題への関心や動機を痩せ細らせてしまう可能性があるということである。

こうした問題意識にたち、本研究では環境正義の議論とは別の、ただし相互に補完・補強しあうようなものとなる自然理解の立場を明らかにすることを目指し、ブクチンの自然理解を環境徳の一種として位置づけることを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は人間中心主義という環境倫理学の古典的題材を今日の思想的・社会的文脈のなかで改めて検討し、その積極的意義——とりわけ環境徳倫理学研究を進めるうえでの意義——を明らかにする。具体的には、(1)環境徳倫理学研究を人間中心主義の発展的解釈として展開する、(2)Murray Bookchinの思想に見られる人間中心主義を環境徳倫理学の議論へと接続する、(3)環境徳を比較倫理学の視点から検討するという三つの課題に取り組む。以上の作業を通じて、人間中心主義のより幅広い、文化横断的な解釈を提示するとともに環境保護の多面的な道徳基盤の構築に寄与することが本研究の狙いである。

本研究は以下の三つの目的を設定する。第一に、環境徳倫理学を人間中心主義の新たな展開として位置付ける。ただし、本研究が取り組む人間中心主義は、持続可能性を度外視するかのよう自然との関わりを肯定するものではなく、自然保護へと向かうものとして想定される必要がある。そのための、理論的な柱の一つとして本研究が挙げるのがマレイ・ブクチンの思想であり、これを環境徳倫理学と結びつけることが、本研究の第二の目的である。

これまで「受傷性」や「感情移入」をキーワードとして、環境徳倫理学の文化的側面についての論文を発表してきたが、本研究でも、自然との関わりの中で用いられる語彙の解釈をもとに、異なる文化や時代における環境徳を比較することが、本研究の第三の目的となる。

## 3. 研究の方法

ブクチンの著作および環境徳倫理学、徳倫理学に関する文献を調査した。本研究期間中、他の研究者や出版社とやりとりするなかで、環境徳倫理学の主要文献の一つであるロナルド・サンドラーの *Character and Environment: A Virtue-oriented Approach* を翻訳する機会を得たため、同書の翻訳作業を足掛かりとして環境徳倫理学の研究状況を把握した。またこの研究期間にシュレーダー＝フレチェットの『環境正義』の共訳に加わったことで、環境正義の視点を最確認し、対照することができた。

当初計画していたブクチン関係者へのインタビュー等は、パンデミックのために中止した。

## 4. 研究成果

ブクチン研究を中心にする予定がパンデミックのために変更を余儀なくされたことと、翻訳出版が大きな比重を占めることとなったため、当初計画していた論文を研究機関内に書き上げることはできなかった。ブクチンについての研究成果は、今年度中の論文投稿を予定しているほ

か、年度末に登壇を依頼されている二件の国際会議での報告に間接的に反映する予定である。ブクチンの弁証法的自然主義において前提とされた自由の拡大へと向かう自然の傾向性は、自然についての事実認識として擁護されるのではなく、自然に自由の拡大へと向かう傾向性を認めることを環境徳として位置づけられることで、いっそう有意義なものとなることが示されるだろう。代表的な環境徳の一つである「自然への敬意」のほか、「自然への礼儀」などが関連する環境徳ないしは環境徳の実践として位置づけられることになる。

環境徳倫理については、この分野の文献の日本語訳がほぼ存在しないなかで訳書を刊行したことが大きな成果であり、本書に関連した報告を複数の研究会で行った。また、比較環境倫理の関心から、雑誌『環境倫理』に先住民の伝統食についての紹介論文を寄稿した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>熊坂元大                                | 4. 巻<br>4           |
| 2. 論文標題<br>『先住民の伝統食』について(特集1ラウトレッジ・ハンドブックの紹介) | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>環境倫理                                | 6. 最初と最後の頁<br>26-31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難        | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>熊坂元大                         | 4. 巻<br>50            |
| 2. 論文標題<br>「普通」で「自然」な人間と動物の関係とは?       | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>現代思想                         | 6. 最初と最後の頁<br>152-160 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>熊坂元大                               |
| 2. 発表標題<br>持続可能性のためのエシックスとは? サンドラー『環境徳倫理学』を読む |
| 3. 学会等名<br>シノドス・トークラウンジ (招待講演)                |
| 4. 発表年<br>2022年                               |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>熊坂元大                      |
| 2. 発表標題<br>徳倫理学は環境問題の解決にどのように寄与しうるのか |
| 3. 学会等名<br>環境思想・教育研究会 (招待講演)         |
| 4. 発表年<br>2022年                      |

〔図書〕 計3件

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>吉永明弘、寺本剛、熊坂元大、太田和彦、佐久間淳子、神沼祥子、山本剛史、佐藤麻貴、犬塚悠、紀平知樹 | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>昭和堂  | 5. 総ページ数<br>259 |
| 3. 書名<br>環境倫理学   |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>クリスティン・シュレーダー=フレチェット、奥田太郎、寺本剛、吉永明弘、山本剛、熊坂元大、宮崎文彦、田中さをり、竹中真也、齋藤宜之、青田麻未、猪口智広、佐藤麻貴 | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>勁草書房  | 5. 総ページ数<br>464 |
| 3. 書名<br>環境正義：平等とデモクラシーの倫理  |                 |

|                              |                 |
|------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>ロナルド・L・サンドラー、熊坂 元大 | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>勁草書房               | 5. 総ページ数<br>240 |
| 3. 書名<br>環境徳倫理学              |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|